

お悩み解消通信講座2 サンプル

※警察が関与する事件が起きます。苦手な内容かもしれないと思われた方は、ご購入の前にお気軽にお問合せください。

撮影・床オナ・貞操帯・羞恥・射精管理・寸止め・オナニー・兜合わせ・フェラチオ・恥垢舐め・乳首・拘束強制絶頂・ドリル・オナホール・言葉責め・失禁・潮吹き・連続絶頂など

庄司という男性は、まるで熊のようだった。大柄な体のせいか、スーツが少しきつそうに見える。

「よろしくお願いします」

「よろしく」

差し出された手は硬く、厚みがあった。何かスポーツでもしているのだろうか。

「つらくなったらここに逃げておいで。匿ってあげるから」

「え……あ、ありがとうございます」

つらい、というのは撮影のことだろうか。でも撮影でつらい思いをしたら、鎬谷がきつと慰めてくれる。

「こいつが」庄司が鎬谷を指した。「ひどいことしたときも逃げてきていいんだよ。ちゃんと俺が叱ってあげるからね」

「あ……、えっと」

鎬谷に視線をやると苦笑していた。きつといつもこんな感じ、ということなのだろう。

「なんで庄司さん、潤くんにはそんな優しいんですか」鎬谷を挟んで右側にいた上田が、非難がましい目で庄司を見た。

「俺は可愛い子には優しいの」上田にぎろりと厳しい目を向けた庄司が、優しい目で潤に「ね」と微笑む。

(どうしよ……)

きつと仲がいい三人組……ということなのだろうけれど、どう返したらいいのか分からず黙る。

「——それよりお前、ちゃんと潤くんに謝ったのか？」

庄司がもう一度厳しい視線を投げると、上田は素早く鎬谷の背に体を隠した。それに対し、鎬谷は冷めた目で視線を向けるだけ。

「おい」庄司がすくむ。

「謝りました！ お許しいただきました！」

「本当か？」

「本当です！」

「あの、すごくたくさん謝っていただきました！」謝罪の場には鎬谷もいたのに、何も言ってくれないので慌てて割って入る。「もう気にしてないですっていうか、そのおかげで、その……」

——鎬谷と、ちゃんと心を通わせることができた、とは恥ずかしくて言えない。

「……まあ、潤くんがそう言うならいいけど。でも謝られたからって、許さなくてもいいんだからな？」

「え？」

「謝る方は謝ったことですつきりするけど、された方は許さなきゃいけない気持ちになるだろ？ でも許さないって選択肢もあるんだ」

「あ……」

そんなこと、考えたことがなかった。謝られたら許して仲直りしないといけないと思っていたし、そうしてきた。

「悪いことした方だけ楽になるってそんなのおかしいだろ？ だから潤くんは一生上田を許さなくていいからな」

それはちよつと……と思っているときようやく鎬谷が間に入ってくれた。

「庄司、そこまで。上田のことは俺からもしつかり叱っておいたから」

「それはそれは」庄司が二の腕をさすった。怖がるふり。面白い——けれど、鎬谷がいじられるなんて。

鎬谷を見ると、すぐに視線がぶつかった。困ったように笑われる。ようやく鎬谷と通じることができた気がしてほつとした。

「——潤くん、そろそろ行きましょうか」鎬谷が潤の背後に回った。「この二人のことは忘れてかまいません」

「え」きちんと挨拶をしたかったのに、車いすの向きがぐるりと変わった。容赦ない——でもそれほど鎬谷は二人のことを親密だと思っている……ということなのだろう。

「あ、えつと、あの、ありがとうございます！」

振り返りながら言うと、庄司と上田が手を振ってくれた。

「潤くん、頑張つてな」

「じゃあ、俺もそろそろ——」

「お前はまだ發送準備が終わってないだろうが！」

後ろから聞こえる声。思わず笑うと、鎬谷も笑った。

「すみません、うるさくて。それに怖かったですよ」

「いえ、素敵な人ですね」

初対面なので緊張したけれど、友達に紹介してもらえたことが嬉しかった。それに二人とも優しくかった。上田は少し逃げ腰だったけれど、それは潤のせいではないだろう。部署が違うのでなかなか会う機会はないかもしれないけれど、次はゆつくり話してみたい。それで、潤の知らない鎬谷を教えてほしい。

——そんなことを考えていたら、ゆつくりと車いすが止まった。

「鏑谷さん？」

「——それは庄司ですか？ 上田ですか？」

鏑谷の低い声に、己の失言を悟る。

「あ……あ、あの、か、鏑谷さんです……」

取り繕うように言うだけでも顔が熱くなる。それでもそう言わないと大変なことになる——というのはこの一週間、ずっと鏑谷と一緒に過ごしたことで重々学んだ。

「……無理しないでいいですよ」鏑谷が力を抜くようにふっと笑った。

冗談だったのか——少しだけホッとす。

先日、テレビに出ていた俳優を「かっこいい」と褒めたら、突然鏑谷のまとう空気がスツと冷たくなり、無言のままベッドに運ばれた。そしてわけも分からぬまま貞操帯ごとペニスを舐められ、泣いて許しを乞うまで放してもらうことができなかった。ペニスは勃起すら許されず、苦しくて……しかし許してもらった後も射精させてもらうことはできず、泣き疲れて眠りに就いたのだ。

——あんな思いはもう二度としたくない。

「無理してないです。僕は鏑谷さんが好きなので……」

本音で告げると、またゆっくりと景色が流れ始めた。

「可愛い顔は私以外に見せないください」

意味を問うように背後を見上げると、また車いすの動きが止まった。しかし今度は潤に覆いかぶさるように鏑谷の体が近付いてくる——カチャ、という音がした。

「ここが潤くんの部屋です」

「あ……」抱きしめられるかと思ったのに。どうやら思わせぶりに体を近付け、ドアを開けただけのようだった。

しかし部屋を見て、意識はそちらに切り替わった。

広い部屋だ。それにバリアフリー。けれどドアの横にシューブラックがあるので、土足の部屋ではないようだ。

「一応、車いすでも動ける部屋にしたんですが」

「歩きます」

杖は念のため持ち歩いているし、部屋の中ならそれほど歩くこともないだろう。調子が悪い日だけ車いすを使わせてもらえばいい。

車いすから降りて靴を脱ぐ。差し出された杖を受け取ると、鏑谷が車いすを畳んでくれた。

「すみません」

「いえ、それよりソファへ。打ち合わせはこの部屋で行いますから」

頷いてソファに座る。大人が三人は座れる大きなソファがテーブルを挟んで向かい合っている。

「緊張してますか」鏑谷が冷蔵庫を開けながら言った。

「少し……でも頑張ります」

今日から始まる仕事はペニスの鈍感化だ。受講して敏感になったペニスの感度を、また鈍

くさせていく。

「基本的な仕事時間は打ち合わせも入れてほしい六時間です。もし疲れたら、そのときは遠慮なく言ってくださいね」

「ありがとうございます」

差し出されたお茶を受け取り、一口飲む。

この日を、ずっと楽しみにしていた。別に露出の趣味があったわけではないと思う。しかしDVDを見ながら、人に撮影されるのはどんな感じなのだろうか、きつと恥ずかしくて楽しいんだろうとか……結局は、そちらの趣味が芽生えてしまったということだ。見られたい、撮られたい——でも体に触れるのは鎗谷だけがいい。とんだわがままだけれど、鎗谷はそれでいいと言ってくれた。

つい時計を見てしまう。壁に掛けられたアナログ時計は学校の教室にあるようなシンプルなもの。あと五分で十三時。そろそろスタッフが集まる頃だろう——と思ったちようどそのとき、部屋にノックの音が響いた。

「は、はい！」

立ち上がり、来訪者が入ってくるのをその場で待つ。先日入職の手続きに来たときに挨拶は済んでいて、足の障がいのことも伝えてあった。その時点ですでに鎗谷から伝わっていたということもあり、みんな「体を第一にしてやっつていこう」と言ってくれたのだ。

「おはようございます。潤くん、今日からよろしくね」

よろしくお願いしますと頭を下げ、入ってきた人の名前を順に思い浮かべる。カメラマンの亀田と監督の勘田、それから照明の正田(しょうた)。

三人は向かいのソファに腰を下ろした。鎗谷は潤の右隣に座る。

「じゃあ、打ち合わせを始めます」勘田が切り出した。「聞いてると思うけど、今回は販売用ではなく、あくまで新講座設立のためのデータ収集のようなものだから、気楽にね」

「はい。ありがとうございます」

渡された書類に視線を落とす。

敏感から鈍感へ

目標

- ・手コキやオナホールなど一般的な刺激では射精できないペニスに変える
- ・ペニスを出すのが怖いと思わせる(発展)

カリキュラムの流れ

※必ず射精までの時間を計ること

1 どの程度敏感かを確認する

・オナニー

2 鈍感化スタート(玩具使用)

・オナホール

3 どの程度鈍感になったかの確認

・床オナ

4 自ら玩具を使用できるかの確認

進捗の確認(案)

潮吹き絶頂(漏斗と瓶を用いて潮の採取、提出)

読み終えて、鳥肌が立った。だってペニスを出すのが怖くなるまで、なんて。

~~~~~

「さあ、では潤くん、そろそろ」 錆谷がテーブルの上にあつた薄い布を取り去った。

「あ、はいっ！」

緩んでいた気持ちを引き締め、錆谷に支えてもらいながらガラステーブルに上がる。

(あれ……)

ガラスが汗をかいている。手をつくると、ほんのりと温かい。誰がしてくれたのかは分からないけれど、その温かさが心をさらに和ませた。ほっとできる温度。寝そべると、お腹もじわりと温かくなった。

「怖くないですか」 錆谷が隣から訊いた。

「はい。大丈夫です」

高さは一般的なダイニングテーブルと同じくらい。一メートルもないけれど、下が見えるので少し怖い。

「夢中になりすぎて落ちないでくださいね」

「お、落ちませんよ」 そう言いながら、手を伸ばしてテーブルの幅を確認する。シングルベッドと同じくらいだろうか。これならわざと端に寄らない限り、落ちることはないだろう。

「何かあれば遠慮なく言ってください」

錆谷が隣の椅子に座った。亀田もテーブルの下に潜り込み、カメラを構える。

(あ……)

もう、ペニスが潰れているのが見えているだろう。

「潤くんのタイミングで始めてね」

「はい」

勘田に領き目を閉じる。陰部がじりじりと熱く感じるのは下から当てられている照明のせいだろう。いやらしいところがしっかりと映るよう、テーブルの脇にしゃがんだ正田によってライトが調整されている。

(ああ……見られてる……)

そう思うと興奮した。それに床オナは久しぶりだった。大好きな快感をもうすぐ得られる——錆谷に敏感にもらったのと思うと少しもったいないような気持ちになるけれど、

仕事だという意識と、何より床オナへの欲求には抗えず、四人の視線を感じながら腰を揺らした。

「っ……」

元々、足がよくなかったので腰の振り方は縦ではなく横だった。骨盤を揺らすように左右に動かすと、敏感な裏筋がごりごりと潰れる。

「あっ、ん、っふ、んっ……」

ガラスが硬い。それが気持ちいい。やっぱりオナニーは手やオナホールより、床がいい。

「あっ、あっ」

ゴリゴリゴリゴリ——より潰れるよう、体重をかけて腰を揺らす。

「ああっ、あっ、あっ、出るっ、もうっ……んっ……んっ……!!」

胸を反らせるようにしてペニスを押しつけると、お腹の奥から快感が弾けた。

「ああ……はあ、はあ……」

ほんの数分だった。五分も経っていない。なのにイってしまった。激しい絶頂に体がずんぐりと重くなっている。

「はあ、はあ……」

跳ねた鼓動が落ち着かない。ドクンドクンと全力疾走をした後のように激しく動いている。

「潤くん」

「っ……!!」

目を閉じていたせいで、すっかり忘れてしまっていた。下を見ると、亀田の足が見えた。

~~~~~

「満谷さんは眠くないんですか」

「潤くんが乳首で気持ちよくなっているところを撮影され、みんなに見られてしまうと思ったら眠気なんて吹き飛んでしまいました」

満谷はいつも、恥ずかしいことをさらりと言う。でもそういうところがすごく好きだ。満谷自身も潤のことをいやらしいと言い、そういうところが好きだと言ってくれるので——相性はきつといい。

「えつと……じゃあ僕はどうしていらいいですか」

乳首イキ講座については自分には関係がないと思っていたので資料請求すらしていなかった。だからどのように進められていくものなのかすら分からない。

「まだ詳細が届いていないので断定はできませんが、おそらく床オナ卒業講座のDVDと同じように私が背後から潤くんを抱きしめて、乳首をいじることになると思います。それを正面からカメラで撮ってもらいます。潤くんのいやらしい顔も、こねられて悦ぶ乳首のアップも、触られてもいないのに勃起しているおちんちんも……全部しっかりと」

「ああ……」

想像しただけで熱い息が漏れ、ペニスが硬くなった。数時間前には強制的に失禁までさせ

られて、もう自分そんな気分にはなれないと思っていたのに。ペニスだつて疲れてしまったもう嫌だと言っているように感じていたのに。

しかし硬くなり始めてもペニスは貞操帯の中なので、鐫谷に気付いてもらうことはできない。苦しい。今すぐ外してペニスを楽にしてほしい。

「鐫谷さん……」ねだるような目で見ると、力強い腕で腰を抱き寄せられ、さらに下腹部が密着した。

「あつ……」

「素晴らしい感度ですね」

「あ……僕……」

貞操帯でペニスの状態なんて分からないはずなのに——鐫谷には何でもお見通しだった。

「鐫谷さんがえつちなこと言うからです」

「えつち？ そうですか？ ただ仕事の流れを説明しただけなんです」

鐫谷には勝てる気がしない。逃げるように唇を閉じ、胸に額を擦り付ける。

「うう……」

「——今は恋人の時間ですから、寝転んだまましてみましようか」

されるところを想像してみる。しかし寝転んだままでは片方の乳首しか弄ってもらえないような気がした。

乳首いじりなんて受講中にしただけだ。だから久しぶり……そう思うとペニスはさらに膨らみを増し、理性をどんどん奪っていった。

「撮影でするみたいにしてください」

いやらしいと言われるんだろうなと思いつつ、そうは言われなかったものの、クソツと軽く笑われた。それだけで十分体は高まっていく。

「素直ですね。起き上がれますか」

そうだ——寝転んだままだというのは事故の事を聞いて潤が息苦しくなったからだ。鐫谷の気遣いを無駄にしまった……と思ったけれど、頭の中はもう自分が遭った事故のことよりも、鐫谷に体を弄られることばかり。

「大丈夫です。ありがとうございます」

体を起こすとすぐ、鐫谷が背後に座った。肩を引いて寄りかかるように促され、その甘やかさに自然と頬が緩んでしまう。

「鐫谷さん」

「何でしょう」

「大好き」

鐫谷が息を呑んだような気配があった。普段あまり驚くことがないから珍しい。でもそれは潤が普段から愛情を伝えていなかったからだ。これからはもっと言葉にして伝えていかなくては——少なくとも、好きと言って驚かれない程度には。

「大好き……大好きです」

「——私ものです」

鑓谷の口が耳元に触れた。唇の感触を刷り込むように、首筋の辺りに擦りつけられる。

「あっ……」

腰に鑓谷の熱いものが当たった。勃起している。嬉しい。

「鑓谷さんっ……」

ペニスが欲しくなってしまった。でもあまり入れてもらっていると仕事に支障が出てしま  
うからいけない。

でも欲しい――。

体の向きを変え、正面から鑓谷を見上げる。

「――潤くん、」

「鑓谷さん。……鑓谷さんが欲しいです」

まるで懇願するような声になってしまった。もっと軽く言わないと、鑓谷が断りにくくな  
ってしまうのに。

「……ええ、私も入りたいです。潤くんと一つになりたい」

気遣いか……本心か。

鑓谷の首筋に顔を埋め、肌に擦り付けながら上げていく。潤の唇が鑓谷の頬に当たったと  
き、振り向くように動いた鑓谷に唇をふさがれた。

「ンッ……」

大好きな鑓谷とのキス。早く舌を絡めたい。

「んん……んんっ……」

ペニスが痛みを訴える。これ以上硬くなったらペニスが貞操帯の跡が残ってしまいそうだ。  
しかし今はそんなことを伝えるより、鑓谷の唾液を味わいたい。

「ん、ふ、んんっ」

鑓谷に唇を舐められた。やっともらえる。唇を開いて鑓谷の舌を吸い、中に引き込む。

「んっ……」

急くな、とでも言うかのようにゆっくりと腰を撫でられた。でももう欲しい。鑓谷の全て  
が欲しい。

「あっ……」

唾液を二回飲ませてもらったところで唇が離れた。寂しい。また早く唇を擦り付け合いた  
い。

「鑓谷さんっ」

待っていられず、潤の方から唇を重ねた。鑓谷のように丁寧なキスなんてできない。歯が  
ぶつかることだけは避けるように意識して、無我夢中で鑓谷の唇を吸い、食み、舌を差し入  
れる。

「んっ」

今度は鑓谷に舌を吸われた。息苦しい。吸われるとこんな感覚になるのか。

「んんんっ」

今までの自分の行いを反省した。けれどやっぱり……鑓谷の舌が吸いたくなってしま



「んうう……」

こくん、と飲み込む音が聞こえた。潤の唾液を飲まれたのかもしれない。普段はしている側なのに、飲まれたかもしれないと思うだけで体の熱が一気に上がった。

「はあ……鐘谷さん……」

「潤くん、おちんちんが痛いんじゃないですか」

「っ……痛い、です……おちんちん、大きくなって貞操帯に当たってます」

くくく

体の拘束が終わり、「じゃあ始めます」という監督の声にみんなが頷いた。

「よろしくお願いします」

目をつぶり、ペニスがおナホールに覆われるのを待つ。

「あっ……」

やはりオナホールがかぶさる瞬間は気持ちいい。このまま動かなくても、この感触だけで射精できるのではないかと思うほど体が高まっている。

けれど――。

カチツという音がした。ゆっくりオナホールが動き出す。

「あ、あっ……ああっ！」

強い快感。やはりシャワーを浴びるだけでは足りなかった。体の奥底にくすぶっていた火種が、オナホールによって爆発した。

「いくっ……！」

叫んだ瞬間、みんなの驚いた声が聞こえた――ような気がした。

「あああああああああああ！」

回転が速くなり、刺激がいつそう強くなった。ピュッピュと精液が出ているのに、それを絡め取るようにオナホールが回転する。

「あああああああああ！ イっだあああ」

まだ動き始めたばかりだというのに、もう射精した。射精してしまった。

「いやあああああ！」

まだ一分も経っていないのに。もしかしたら三十秒も経っていなかったかもしれない。今日の責めは十五分――。先は長い。なのにもう出してしまった。本当は五分間刺激されてもいけないというところまでペニスを鈍くさせないといけないのに。

「あああああああああ！」

回転は止まらない。ぎゅううと腹筋に力が入る。背中が丸まる。しかし拘束が邪魔をして、楽な姿勢をとることができない。

「やあああああああ！ ああああ！」

喉が痛い。

（ああ、ダメっ）

ペニスの先から水っぽい液体が出ている。でも、誰にも気付いてもらえない。

「おじおとおお！ おじお出でるうう！」

潮を吹いている、だから止めて……：そう言いたいのにきれいな言葉を発することができない。

「ああああああ！ おじおとおお！」

刺激がきつい。亀頭が痛い。拘束された手足も痛い。

「あああああああああ！」

ペニスが萎える——なのに、苦痛を感じているはずなのに、それを超えてまたペニスが立ち上がってしまう。

~~~~~

それから一週間。DVDの発売が始まったことで、鐺谷はしょっちゅう会議に呼ばれるようになっていた。

「会議ばかりですみません」

「いえ。お仕事ですから。では僕は先に帰っていますね」

「大丈夫ですか」

「大丈夫です」

ペニスはムズムズしているけど、射精したわけでもないし——射精はしたくてたまらないけれど、射精していない分、体力は残っている。

「では帰宅したら連絡を入れてください」

「分かりました。夜ご飯、何がいいですか」

「何でもかまいません。楽なもので」鐺谷は顎に手を当て、上を見た。「いえ、やはり私がコンビニで買って帰りますよ」

「もつたいいですよ。僕、作っておきます」

そろそろ冷蔵庫の中も寂しくなってきたので、何か工夫しなければ。でも鐺谷は何を作っても文句を言わずに食べてくれるし、潤自身はもつと質素な生活が普通だったので何も気にならない。

もう会議室に向かわなければならぬというので、その前にキスをしてもらった。上から覆いかぶさるようにして、唾液を吸わせてもらう。

コクン……甘くて美味しい。本当は飲み込まずにしばらく口の中にとっておきたいけれど、それをしたらすがに変態だと言われてしまいそうで。

「家に帰ったらもつとしましょうね」

鐺谷が潤の濡れた唇を指先で拭いた。その指を、吸いたくなってしまった。ちゅうつと吸って、甘えたい。でも、鐺谷が家に帰ってくるまでの我慢。

「はい。たくさんしてください」

「ええ。……そうだ、今夜DVDを見ましようか」

嬉しい言葉に笑顔で頷き、会議室に向かう鐺谷を見送ってから、会社を出た。

DVDはどんな出来上がりになっているのだろうか——そう考えるとワクワクして、ドキドキして、恥ずかしくて、ふとしたときに車いすを漕ぐ手が止まってしまつて、歩行者にぶつかりそうになってしまつて。謝つたら、「手伝いますよ」と優しく声をかけてもらつて。そうやって、家に帰るまでふわふわした気持ちで浮かれていた。

マンションに着き、集合ポストを覗く。するとダイレクトメールやチラシの中に一通の見慣れない茶封筒が入っていた。

(僕に……?)

いったい誰だろうか——裏面を見ても差出人の名前は書かれていない。まさか両親だろうか。潤に会いたくなって探してくれたのだろうか……はやる気持ちを抑え、部屋に入る。

鐺谷が買ってくれた室内用の小さな車いすに乗り換え、手洗いうがいをしてすぐに封筒を開けた。

「——え」

中を見て、思わず声が出た。

手紙は、両親からではなかった。かといつて誰からなのかも分からない。便箋には一言「死ね」と書かれているだけだった。

鼓動が速くなり、手が震えた。頭がカーツと熱くなって、それから一気に冷えて……何度読み返しても、便箋の裏側を見ても、その死ねという言葉だけ。

封筒を見る。住所も名前も一文字も違えていない。竹下潤様——きちんと様まで付けられている。切手もきちんと貼られている……しかし消印がないことに気が付いた。

(直接入れたってこと……?)

それとも消印の押し忘れだろうか。そんなことあるのだろうか。でももし人の手で押しているのなら、漏れてしまうことはあるだろう。でもこんな内容のものが偶然……?

考えてもよく分からなかった。それでも幸いだったのは、その死ねという言葉が鐺谷の筆跡でも、両親の筆跡でもないことが明らかだったことだろう。

捨ててしまおうかと思つたけれど、不用意にゴミ箱に入れて鐺谷の目に付くのは嫌だった。心配をかけたくないし、何より死ねと言われてしまうような人間であると知られてしまうのが怖かった。

(どうしよう……)

家のゴミ箱では破いてもきつとばれてしまう。それならどこかに隠してしまおうか——いやそれよりもどこか公園やコンビニのゴミ箱に捨ててきてしまった方がいだろうか……。家庭ゴミの持ち込みは禁止といわれているけれど、封筒一通くらい許してもらえないだろうか。

時計を見ると、帰宅してからすでに三十分が経っていた。そんな長い時間この二文字を見つめていたのかと思うとゾツとする。でも心当たりは全くない。仕事の人だろうか。でもみんな優しいし——もしかして鐺谷を好きな人がいたのだろうか。それで恋人である潤に——

そう思ったら余計に錆谷に知られてはいけないと思った。だって錆谷は自分のせいだと思っ  
てしまうだろう。

そのとき、携帯のバイブ音が聞こえた。驚き、心臓が痛くなる。震える手でリュックから  
取り出し表示を見る。錆谷だった。

「も、もしもしっ」

『潤くん！ 良かった……まだ外ですか？ 何かありましたか』

あ……そうだった。帰ったら連絡しなければならぬことをすっかり忘れてしまっていた。  
「ごめんなさい。帰る途中お腹が痛くなって……今、ずっとトイレにいたんです。でももう  
家なので」

咄嗟に嘘を吐いてしまった。バレたらどうしよう……傷付けるような嘘ではないけれど、  
嘘を付いたこと自体が傷付ける。それに潤自身の胸も痛んだ。やっぱりいけない。嘘はダメ  
だ――。

「あの、僕――」

『大丈夫ですか？ 私はもう終わったのですぐに帰りますから、暖かくしてお布団に入って  
いてください』

「あ、あの……」

『潤くん？ どうしました？ 吐き気とかもありますか』

「――ごめんなさい」

こんなに心配させてしまった。嘘なのに――。

『潤くん？ どうしたんですか』電話の奥でパタパタと走る音が聞こえた。潤の体調が悪い  
と思ひ、急いで帰ろうと錆谷が走っているのだ。

そう思ったとき、急に怖くなった。もしそのせいで事故を起こしてしまったら――。

「ごめんなさい！ 違うんです」

『……違う？』

電話の奥で足音がピタリと止んだ。

「本当は、その……」

『私に言えないことですか』

「いや、そういうわけじゃ……」

『――とにかく無事なんですね』

「はい。大丈夫です」

軽い足音がして、それからパタンと車のドアが閉まる音が聞こえた。

「とにかく今から帰りますから……無事ならそれでいいんです」

無理に訊き出そうとしない錆谷の優しさが痛かった。でもやはりこの手紙のことを言うわ  
けにはいけない。

「あの、僕……」

『はい』

電話の奥は静かなまま。まだエンジンをかけていないのだろう。

「鑑谷さんのこと大好きです……」

どうして電話をしなかったのかは言えないけれど、鑑谷を裏切るつもりはないということだけは分かっている。ほしかった。

鑑谷が息を呑んだような心配がした。しかしすぐに空気が柔らかくなったのが電話越しにも分かる——いや、柔らかくなつたのではない。柔らかくしてくれたのだ。

「知ってますよ。安心してください」

エンジンがかかったので通話を切った。テーブルに携帯を置き、それからもう一度手紙を見て、隠し場所を探す。

鑑谷が見ないところ……どこかい隠し場所はないだろうか。

立ち上がり、クローゼットに向かう。もう杖を使う余裕もなかった。とにかく急がなければ。幸い、緊張のせいか足の痛みは少しも感じなかった。

奥の、季節ものの布団が入っている引き出しを開ける。布団の下に手を差し込み、封筒を隠そうとしたときだった。紙のようなものが手に触れた。

(何これ……?)

明らかに隠されていた。虫よけの類ではない。取り出してみると、白い封筒だった。宛名は鑑谷。差出人は——総合調査。

「何、これ……」

呼吸が息苦しくなった。この短時間に不審な封筒を二通。死ねという文字を見たときよりも激しい鼓動で胸が痛い。

潤と二人で住む家に隠されていた封筒——仕事関連のものではないだろう。ではなぜ隠されていたのか。誰の目から隠したのか……それはもう考えるまでもなく明らかだった。

鑑谷が潤に見せまいとしているものを勝手に見てはいけない。そう分かっているけれど、どうにも中身が気になってしまった。何か怪しまれていたのだろうか。潤の過去にやましいことがないか確認したのだろうか。でももしそうだとしたら、少なくとも潤の記憶にある限り、悪いことはしていない。もし問題なしと書かれていれば、鑑谷は早々に処分したのではないだろうか。となると——鑑谷に関するものだろうか。昔の恋人とか……まさか、婚約者がいるということはない、と思いたいけれど。

震える手で封筒を開く。すでに開封されていたことにまた胸が痛んだ。中身を取り出す——数枚の書類。それから写真。

「え……」

写っていたのは、潤の両親だった。

(お父さんとお母さん……?)

両親は、それぞれ異性と二人きりで写っていた。高級そうなレストランで食事をしている父と女性。街中を楽し気に歩く母と男性。

(これ……誰……?)

親戚だろうか。思い返そうとしても、全く見覚えがない。

写真から目を離し、文章の書かれた書類を見る。

【鍋谷 秀介様

ご依頼いただきました、竹下 潤様のご両親について調査報告を申し上げます。

ご両親はすでにそれぞれのパートナーと家庭を築いており、子供も二名ずつ確認しております。

また、離婚理由については書類二枚目に詳細を記しております。】

「なに……子供……？ 離婚の理由……？」

力の入らない手で書類をめくった。

~~~~~

ハンドリムを回し、エントランスを通って部屋に向かう。すると、外廊下に誰かがいた。

横顔しか見えないけれど、潤と鍋谷の住む部屋のドアを怖い形相で睨(ね)め付けている。パッと見たところ中年の男だ。くたびれたスーツ姿。思わず車いすを漕ぐ手を止めると、男もこちらに気付कि、驚いた顔をした。知らない人だ。全く見覚えのない相手。

でもその様子から、新聞の勧誘に來ただけではないと分かった。

(……あ……嘘……)

男性の腰の辺りで何かが光った。じつと見ると、ナイフが光を反射したのだと分かる。

「……あ……」

声が出なかった。今すぐ逃げないと——頭では分かっているのに体が動かない。

「あ……あ……」

我に返ったのは、おそらく同時だった。男が弾かれたように足を踏み出した。潤も慌てて腰を上げる——こんなときなのに、どこか冷静な自分がいた。このまま逃げれば、股割れズボンの隙間から貞操帯をつけたペニスが剥き出しになってしまう。咄嗟にブランケットを腰に巻き、車いすを置いて走った。

マンションのエントランスに向かう。しかし、集合ポストの方から幼い子供の声が聞こえた。「今日はカレーがいい！」それから女性の声で「じゃあ、にんじんもちゃんと食べるのよ」。

ここに住んでいる親子だろう。そう思ったら、この二人を巻き添えにするわけにはいかないと思った。

急いで方向を変え、階段に向かう。一段飛ばしで駆け上がったなら、二階に着く前に息が上がった。明らかな運動不足。走るなんてもう何年も、それこそ事故以来一度もしていなかったのに、突然それを、しかも階段でしたのだ。右足首もひどく痛む。

それでも逃げなければ殺されてしまう。男が追ってきているのは音で分かっていた。あちらも足は速くない。しかしこのままでは確実に追いつかれてしまうだろう。

どうしよう——。

上に逃げ続けても、どこかの階で廊下に折れても、結局はどちらも行き止まりになってしまふ。逃げ場はない。でもどうにか逃げて、誰か助けてくれるような人に出会えることを祈るしかない。

しかし三階の踊り場に出たとき、右足首が限界を迎えた。声も出ないほどの強い痛みが走り、体を支えられなくなった。後ろへ向かって体が落ちていく。このまま死んでしまうのかもしれない。頭を打つかもされない。頭を打たなくても、あのナイフで目や心臓を刺されて死んでしまうかもしれない。落ちるなんて一瞬のはずなのに、そんなことを考えた。

事故に遭うときはスローモーションって本当だったんだ——そういえば四年前も同じことを思った。周りの景色がゆっくりと動く不思議な現象。

(ああ……もう終わりなのか……)

やっぱり会社で罫谷を待ってればよかった。それか庄司に頭を下げて、素直に送ってもらえば良かった。でももう今更だ。

背中になにかが触れた。同時にお腹に強烈な痛みが走る。

あーもう——……。

約13万5千字。

よろしくお願いいたします！

お読みいただきありがとうございました！

お悩み解消通信講座2 サンプル

gooneone (ゴーわんわん)

2021/4/2

メール: gooneonegooneone@gmail.com

pixiv: 19591291

Twitter: @gooneone11

LINE: gooneone

